



小岩四中だより
自主 品位 明朗 友愛
ひとすじの光

ふれあい(いじめ防止強化) 月間 no.4

教育目標

明るく、心身ともに健やかで
ひとりだちのできる心豊かな人間になろう

令和8年度 臨時号6

令和8年6月29日 発行

江戸川区立小岩第四中学校長 村松 弘一

「いじり」と「いじめ」の境界線を考える

校長 村松 弘一

「笑い」と「傷つき」がすれ違う、その一瞬を見逃さない

同じ言葉をかけられても、「冗談だから」と笑えるときもあれば、「もうやめてほしい」と心の中で叫びたくなるときもあります。その違いは、どこから生まれてくるのでしょうか？

日々の学校生活の中で、教室や部活動では、友達どうして笑い合う姿や、ふざけ合う様子がたくさん見られます。友達との何気ない会話ややりとりは、中学校生活を楽しくしてくれる大切な時間です。

一方で、その「ふざけ合い」の中に、受け取る人によっては深く心を傷つけてしまう言葉や行動が紛れ込んでいないか、気になる場面もあります。「いじりといじめの違いがよく分からない」という声が、生徒や保護者の方から聞かれることもあります。先日の生徒総会でも話題になっていました。そこで「学校だより臨時号2『笑い』と『いじめ』の境界線を見つめ直す」に続き、今回、「いじり」と「いじめ」の境界線について考えます。

「いじり」と「いじめ」の違い

同じ一言でも、受けとめ方が変われば「いじり」は「いじめ」に変わる。

境界線を考えるには、「いじり」と「いじめ」の違いを、はっきりさせておくことが大切です。

「いじり」という言葉は法律には出てきませんが、一般的には、友達どうしの親しさの表れとして、軽くからかったり、冗談を言い合ったりすることを指すことが多いと言われています。お互いが安心して笑えていて、やめてほしいと言えばすぐにやめられるような対等な関係で行われているときに、はじめて「いじり」と言えるでしょう。

一方、「いじめ」は法律で定義されています。いじめ防止対策推進法では、同じ学校の児童生徒などから、一定の人間関係のある者によって行われる行為であって、その行為を受けた側が心や体の苦痛を感じているものを「いじめ」としています。からかいであっても、言われた人が苦しいと感じていれば、「いじめ」と受けとめなければなりません。

同じ言葉や行動でも、言われた人が「つらい」「こわい」「もうやめてほしい」と感じているなら、それは「いじり」ではなく「いじめ」です。この「感じ方」を大切にすると視点が、境界線を考える上で欠かせません。

どこからが「いじめ」になるのか

「みんな笑っているから大丈夫」が、「いじめ」を見逃す一番危険な考え方。

「いじり」と「いじめ」の違いを考えると、特に大切にしたい視点が三つあります。

第一に、相手が本当に安心して笑えているかどうかです。周りは笑っていても、本人だけが笑えていないように見えるとき、その場にはいないところでその人の話題が何度も出てくるときには、「ちょっとやり過ぎではないか」と立ち止まって考える必要があります。

第二に、「やめてほしい」というサインが出ていないかどうかです。「もういいよ」「それはやめて」といった言葉はもちろん、表情がこわばっている、黙り込んでしまっているといった変化も、はっきりしたサインです。そこから先は、もはや「いじり」ではありません。

第三に、いつも同じ人ばかりが対象になっていないかどうかです。特定の一人だけがからかわれ続けている、同じ人にだけ失敗や雑用が押しつけられているような状態が続くとき、それは「いじめ」として受けとめなければ

ばなりません。「特定の生徒への繰り返される行為」は、「いじめ」を見つける大切な手がかりです。

そして何よりも、「変えることのできない特徴」を笑いの材料にしてはならない、ということです。生まれつきの体の特徴、からだの大きさや顔立ち、病気や障害、家族のこと、文化やルーツなど、その人が自分の努力では変えられない部分を取り上げてからかったり、あだ名にしたりすることは、たとえ**その場がどれほど笑いに包まれていても、「いじり」ではなく、「決して許されないいじめ」**です。

学校教育では、特別の教科道徳や人権教育を通して、人間の尊厳を大切にすることや、見た目や能力などの違いによって人を差別してはならないことを繰り返し学んでいます。こうした学びを土台にして、体の特徴や家庭の事情などを笑いの対象にする行為を決して認めない、許さないという姿勢で指導を進めています。

静かに進んでしまう「いじめ」

「自分さえ我慢すれば」が、「いじめ」を長引かせ、広げてしまう。

「いじめ」の問題は、とても「相談しにくい」面があります。大人から見れば「すぐに言ってほしい」と思うことでも、子どもにとっては、「学校に伝えたことで、今の人間関係が壊れてしまうのではないか」「クラスで浮いてしまうのではないか」という不安が先に立ちます。

そのため、「あまり大げさにはしたくない」「多少は我慢しなければいけない」と感じ、なかなか表に出そうとしないことがあります。「これくらいなら、自分さえ我慢すれば」と考えてしまううちに、少しずつ、つらさが増し、気づかないうちに周りの友達にも広がっていく危険性があります。**最初は「いじり」と受けとめていたことが、静かに「いじめ」へと変わってしまうことがあるのです。**

表からは見えにくい「いじめ」こそ、知らないうちに深刻さを増してしまいます。「どの子にも、どの学級でも起こりうる」という前提に立ち、小さなサインを見逃さないことが大切だと考えています。

言葉の力をどう使うか

その一言を、誰かを笑わせるためではなく、誰かを守るために。

毎日の学校生活の中で、一人一人の言葉や行動には、友達を笑顔にする力も、傷つけてしまう力もあります。

「いじりだから」「冗談だから」と言ってしまうえば、その場は笑いに包まれるかもしれませんが。しかし、その笑いが、誰か一人の大きな我慢の上に成り立っているとしたら、それは本当に楽しい時間とは言えません。

自分の言葉で友達を守ろうとする人、弱い立場に置かれている友達のそばに立とうとする人こそ、本当に勇気ある人です。授業や学活、生徒会活動などを通して、「違い」を認め合い、「いじめ」を許さない雰囲気づくりを続ける必要があります。

共に子どもを支えていくために

見えないところほど、家庭と学校が同じ方向を向いて支えていきたい。

「いじめ」は、学校だけで完全に把握することが難しい問題です。家庭での何気ない会話や、ご家庭での様子の変化の中に、学校での小さな「つらさ」のサインが表れることも少なくありません。

「最近、学校はどう?」「友達とはうまくいっている?」と、時々そっと声をかけていただければ幸いです。そのときには、「いじられていても、笑ってごまかしていないか」「スマートフォンや SNS の使い方困っていないか」といった点にも、子どもの様子や言葉に丁寧に注意を向けていただければと思います。

学校では、「いじめかどうか分からないけれど、少し気になる」という段階で相談していただくことを大切にしています。「友達との関係でモヤモヤしているようだ」「最近、表情や口数が前と違う気がする」といった小さな変化でも、どうぞ遠慮なくお知らせください。学校と家庭が情報を分かち合うことが、静かに進む「いじめの芽」を早い段階で見つけ、被害の広がりを防ぐことにつながります。

「いじり」と「いじめ」の境界線は、はっきりと線が引けるものではありません。しかし、「相手の気持ちを想像すること」「おかしいと思ったときに、その気持ちを言葉にできること」「一人にしないこと」という三つの姿勢を大切にしていけば、「いじめ」の側には立たず、相手を大切にすることを続けていくことができます。

すべての生徒が、ありのままの自分でいてよいと感じられる学校を目指して、これからも取り組みを続けていきます。ご家庭や地域の皆様には、今後ともご理解とご協力をお願いいたします。